

外での基質選択性は、基質への侵入能力、栄養物質や成長阻害物質の存在などに他種との競争がからんでいることを示唆する。併せて、蒸気滅菌の威力に改めて感嘆させられた。

しかし、研究機関に所属しない菌楽者は、研究機器をもたないので、これらの基質選択性を物理・化学的に解明することができない。できることは、観察と台所用品や廃物を利用したごく簡単な実験である。これから得られたささやかな情報を基に理性的に想像し、感性的に幻想し、両者を混ぜ合わせ、こね回して反応させ、仮説を創りだして楽しんでいる。仮説が夢想や妄想であっても一向にかまわないが、菌学者の役に立てば、なお一層菌楽者冥利につきる。

この報告は、エノキタケは松毬培地での子実体形成は無論のこと、菌糸の成長すら不可能という想定のもとに行った実験結果である。「生えない」と思ったが、案に相違して「此の茸はそこいらに落ちている松毬でも出来た」のである。森本氏の笑い声が聞こえてくるようである。

エノキタケとヒラタケは、菌楽者の期待を裏切って松毬に生えたので、「松毬にエノキタケやヒラタケを生やしてなにになるの？」と考えてみたのである。もっとも、この実験は、10年以上も昔の平均余命に余裕のある時代に行ったものである。森本彦三郎氏による菌床栽培の発明の思考とも関係がありそうな気がしてきたので、データをそのまま捨ててしまうのも勿体ないと思い、今年のスライド会を機会にまとめた。はたして題目の答えになったのか些か危ぶむところであるが、これで筆を擱きたい。

なお、著者は、観察の場として京都御苑を活用させていただいている。環境省京都御苑管理事務所に厚く御礼申し上げる。また関西菌類談話会会員の池田晴美氏から、ヒラタケの子実体を、同じく会員で「京都御苑きのこ会」の主催者のお一人である佐野修治氏から松毬に生えたマンネンタケを頂戴したことに深謝する。□

開催報告 「PAPER MUSHROOM /ペーパー・マッシュルーム」

2016年2月9日(火)～14日(日)まで、銀座5丁目にあるウッドバーニングと内外木製品の専門店『GINZA HAKKO 木の香』さんに於いて、会員有志によるきのこグッズ展示を行いました。2回目となる今回は、飯沢耕太郎・北川公子著『世界のかわいいきのこデザイン - 紙ものきのこ図案帖』(DU BOOKS) (p85に紹介記事)の出版にちなみ、PAPER MUSHROOM (=紙に描かれたきのこ)と平面コレクションにターゲットを絞り、さらに昭和初期～高度成長時代のジャパン・レトロに重きをおいて、鉄道案内や駅弁などの包み紙、レアな食品ラベル、古書やカード類など、内外新旧100点以上の関連グッズを展示。同書の表紙デザインとなった大作晃一さんの白バック写真、片山周子さんの本誌表紙の原画と『このは』(文一総合出版) (p82に紹介記事)の挿絵の原画、きのこマトリョーシカの新作、彫金アクセサリーkinoko-monoの浅井土筆さんの新作も多数ならびました。本展では昭和懐かしいイメージで4つのコレクタブルを取り上げた特製ポスターを制作いたしましたので、ご興味のある方は木の香さんへお問い合わせください。お店にもグッズが満載で、13日には展示解説と飯沢耕太郎さんのトークショーが行われました。次回は2017年2月7日(火)～12日(日)開催予定です。(公)

